

日本の色について

はるか昔、私たちの祖先は、どのようにして美しい色彩を纏ったり、室内を飾ったりしていたのか。

人間は原始の時代より、自然界の四季それぞれに美しく咲き誇る草花樹など植物の花弁、根、樹皮、芯材などのいずれかに含まれる色素を抽出して、糸や布を染めていた。あるいは、土の中に含まれている顔料（金属分の化合物）である、朱、弁柄、白緑、群青、鉛白などを塗って彩色していた。中世から近世にかけて人類の科学の進歩は目覚ましく、錬金術という人間の知恵と自然との融合による進歩があった。ところが、一八五〇年代にはヨーロッパにおいて産業革命が起こり、それまでの手工業的、職人的生産が、蒸気機関などによる機械的生産、大量生産へと移行していった。薬でいえば生薬、和漢薬が科学的な医薬品となっていたのである。

二十世紀から二十一世紀へ、人間は自らが作り出した色の色素をどのように使っていくのか。また、五千年以上にもわたって培ってきた、自然界から汲み出してきた天然の染料や顔料による染色法を忘れ去り、過去のものとしてしまってもよいのか。

温故知新！ 古きをたずねて新しきを知る、という言葉をいま一度思い返してみたい。

五行配当表

五行	五色	五方	五時
木	青	東	春
火	赤	南	夏
土	黄	中央	土用
金	白	西	秋
水	黒	北	冬

■ 植物染 草木染

色素が含まれている部分

- 花・・・紅花（紅花）、ミロバランの花（実にも含まれる）、サフラン（雌しべの柱頭）
 - 露草・風仙花・杜若（花びらの摺染の為、染着力が弱い）
- 蕾・・・槐（えんじゅ）、丁字（ちようじ）
- 葉・・・藍（あい）、蓬（よもぎ）、刈安（かりやす、茎にも含まれる）
 - こぶな草（茎にも含まれる）、げんのしようこ、赤芽柏（小枝にも含まれる）
- 五倍子（ごばいし、ヌルデの木の若葉に虫が集まって出来る瘤）
- 実・・・檳榔樹（びんろうじゅ）、矢車（やしや）、橡（つるばみ）、梔子（くちなし）、ミロバラン、コーヒー
- 果皮・・・胡桃（くるみ）、安柘榴（ざくろ）、栗
- 樹皮・・・黄檗（きはだ）、福木（ふくぎ）、楊梅（やまもも）、杉、松、檜、梅
- 芯・・・ログウッド、グレップ、車輪梅（しゃりんばい）、蘇芳（すおう）
- 茎・・・刈安（かりやす）、こぶな草
- 根・・・紫根、六葉茜（むつばあかね）、日本茜、ウコン、玉葱の皮
- 虫・・・臙脂虫（えんじむし）、ケルメス、コチニール
- 貝・・・アキキ貝のパープル腺

■ 繊維の種類

動物繊維・・・毛皮

絹（中国文化圏）動物繊維

羊毛（西方・ヨーロッパ文化圏）

獣毛（ラクダ系）アルパカ、リヤマ、ピクニーヤ（アンデス文明）

植物繊維・・・木綿（インド文化圏、南北アメリカ文化圏）

麻―大麻・苧麻（東洋文化圏）

亜麻（西方・ヨーロッパ文化圏）

その他、藤・楮・葛など

■ 日本の原始時代 縄文時代

火と陽の赤に畏敬と畏怖。

縄文土器の焼成。黒と赤の発見。自然色の土色、朱、弁柄など、赤の顔料を発見。墨色をつける。

青森県山内丸山遺跡にて くるみの袋が発見される。

■ 弥生時代 二〜三世紀

この頃、紅花、藍、紫根などの技法が渡来人によってもたらされる。麻と絹の織物の完成、そしてさまざまな染色法も順次可能に。

奈良県桜井市纏向遺跡 紅花の花粉が発掘されている。

『魏志倭人伝』

その風俗淫ならず。男子は皆露紒し、木縣を以て頭に招け、その衣は横幅、ただ結束して相連ね、ほぼ縫うことなし。婦人は被髮屈紒し、衣を作ること単被の如く、その中央を穿ち、頭を貫きてこれを衣る。禾稻・紵麻を種え、蚕桑緝績し、細紵・縑縣を出だす。

■ 四〜六世紀

古墳文化 前方後円墳。

埴輪の人形 鏡 朝鮮半島への進出。

倭の五王の時代（五世紀）

鉄器の生産、製陶、金属工芸、土木、養蚕、機織りの高度な技術が渡来。

『日本書紀』

阿知使主、都加使主を呉に遣はして縫工女を求めしむ。呉王、工女の兄媛、弟媛、呉織、穴織の四婦女を与えぬ。

『新撰姓氏録』

仁徳天皇の御世、一二七県の秦氏をもって諸都に分置し、即ち養蚕・織絹してこれを貢せしむ。

天皇詔して曰く、秦王献ずるところの糸・綿・絹帛、朕服用するに柔軟、肌膚を温煖す。姓を波多公と賜う。秦公酒、雄略天皇の御世、糸綿帛委積みて岳のごとし、天皇これを嘉す。号を賜わつて禹都万佐という。

仏教の伝来

飛鳥寺の造営 瓦博士 柱は朱、弁柄の赤、窓は緑青。
堂内には金でメッキされた仏像。

六世紀

推古天皇 聖徳太子の政治

冠位十二階

大徳	小徳	大仁	小仁	大禮	小禮	大信	小信	大義	小義	大智	小智
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
濃紫	淡紫	濃青	淡青	濃赤	淡赤	濃黄	淡黄	濃白	淡白	濃黒	淡黒

西暦六〇〇年代前後は職人たちは錦織部、綾部、呉服部などの「部」によって、朝廷および蘇我氏などの豪族に擁護されていた。そのなかで錦部定安那錦という一団は、河内の桃原、真神原にその工房をかまえたという。工房は、近江国滋賀郡、浅井郡にもある。これらはいずれも奈良の都に近いところである。さらには信濃国筑摩郡錦服郷、美作国久米郡錦織郷、四国讃岐の綾部という遠方にもあり、呉服部は摂津国豊島郡、河内、伊勢などに見られる。

法隆寺に今日まで伝来する染織品。

蜀江錦（蜀の国、中国四川省・成都）より輸入、太子間道（世界で現存する最古の絹多色緋）。

「天寿国繡帳」（中宮寺） 亡くなった聖徳太子を偲ぶ。 妃 橘大郎女たちばなのおいらつめが作らせたもの。

国産である。これによって日本における染織の発展が理解できる。

■ 白鳳く奈良時代 7く8世紀

『万葉集』

「鴨頭草つぎくさに 衣ころもは摺すらむ 朝露あさつゆに 濡ぬれての後は うつろひぬとも」（巻七・一三五二）

「紅はうつらふものぞ つるばみのなれにし衣いに なほ及しかめやも」（巻一八・四二〇九）

「茜あかねさす 紫野むらさきゆき 標野ひょうのゆき 野守のりもりは見みずや 君きみが袖そでふる」（巻一・二一〇）

「むらさきのにほへる妹いもうとを にくくあらば人妻ひとつまゆるゑにわれ恋こひひめやも」（巻一・二二一）

「紫むらさきは 灰あしさすものぞ 海石うみいし榴ざくろ市の 八十やその衢ちまたに逢あえる児こや誰たれ」（巻十二・三二〇一）

「韓人かんじんの衣染いぞめむとふ紫むらさきの 心に染ぞめみて思おもほゆるかも」（巻四・五六九）

大化の改新をへて律令国家の形成が現実のものとなり、文武天皇のときに大宝律令が完成するにおよんで、より強固な国家体制が確立されていった。その律令の組織のなかで、色彩関係のものを見てみると、中務省なかつつかさに縫殿寮ぬいどのや画工司えいこうしがあり、大蔵省縫部司おりのつかさ、織部司おりべつかさ、宮内省に内染司うちぞめがある。そのなかの織部司おりべつかさには、挑文師あやとりし四人と挑文生あやとり八人がいる。挑文師は錦を織る際に文様をまず考え、織り組織を図式化して、織機オリにどのように経糸緯糸を通し、操作するかを考えるのが仕事である。

和銅四年（七一）から挑文師の指導が各地にひろまり、その二年後には、鞍作磨心くらつくりのまごころという人物が、すぐれた錦、綾を織り出して、柏原村主かしはらのすけりの姓を賜たまわつたとある。また、同年に刀母離余ともしよえし敷施奈うんげんが暈うんげん縞げん

染をはじめ、その功によって姓を授けられている（日本後紀）暈縹染とは、同系統の色がグラデーションになるものを指すが、それが染色であるのか、織りによる表現なのかはわからない。正倉院宝物のなかに、染物では羅織の生地をあらかじめ黄色に染めてから、板で挟む夾縹染の技法によって藍をかけ、黄から緑の暈し染にした「暈縹夾縹羅」と名づけられたものが見られる。織物では、「七曜菱文暈縹縹」と称するものがあって、横段で色が濃淡であらわされ、和様美の萌芽を思わせる小花が並んでいる。

いずれにしても、中国大陸、朝鮮半島からの渡来人によってその技術が根付いていった日本の絹織物と、それを染める植物染、そして錦や綾の織物、さらには絞（縹縹）、夾縹、縹縹の三縹による染め物などが、七世紀中葉から八世紀の前半にほぼ完成の域に達して、かなり水準の高いものが生産できるようになったといえよう。それも奈良の都、河内平野といった都の近くだけでなく、今日まで伝えられる尾張国、駿河国などの正税帳（決算報告書）を見ると、錦、綾、羅など高度な技術が必要とされる織物類も地方で生産されるようになっていったことが知れるのである。

紫草に関しての文献として『正倉院文書』に豊後国（現在の大分県）正税帳がある。その天平八年（七三六）の項に

球珠郡 天平八年、定正税稻穀壹万漆千式百拾斛陸斗捌升貳合貳勺

国司巡行部内 合老拾肆度……

老度蒔萱紫草園(守一人従三人並四人二日)単捌人上貳人(守)従陸人……

老度随府使檢校紫草園(守一人従三人並四人一日)単肆人上壹人(守)従三人

老度掘紫草根(守一人従三人並四人二日)単捌人上貳人(守)従陸人

と記されており、国司が年に三回、すなわち種を蒔く時、生育状況、そして紫根の根の収穫を把握するために、巡行していることが記されていて、すでに紫草の栽培が行われていたことがわかる。

『衣服令』(養老令) 七一九年

凡そ服式は、白、黄丹、紫、蘇芳、緋、紅、黄橡、縹、葡萄、緑、紺、縹、桑、黄、摺衣、秦、柴、橡、墨、此の如き属は、当色以下、各兼ねて服すること得。

七一〇年 奈良平城京へ遷都

シルクロードの華やかな文化がその東の終着駅 奈良へと入る

七五二年 東大寺 大仏殿建立 華やかな法要が営まれる。

光明皇后が東大寺に聖武天皇の遺愛の品々を献納 正倉院に収蔵されて宝物となる。

■ 平安時代

七九四年 平城京へ遷都

中国の唐様にたいして、和様と称される王朝の雅びな文化の基調をなしたのは、京都の美しい景観であり、日本列島の細やかに移ろう自然そのものであった。貴人たちの関心は、四季それぞれに緩やかに移りゆく草木花の彩りや陽と月の陰影をいかに俊敏にとらえ、それをいかに表現するかということにあった。漢詩にかわつてかな文字によえう三十一文字よりなる和歌が詠まれ、より繊細な情感に表現を生み出した。漢詩に日々ゆるやかに移ろう季の彩りを感じ、それを読みとる視線は、文学における表現にとどまらず、寝殿造

りという貴族の邸宅、そこに配される御簾、帳、几帳などの調度、そして女人たちを飾る衣裳、さらには手紙や詩歌をしたためる料紙など、身の様々なものに及んでいったのである。

『古今和歌集』などをみると、春には

「さくら色に 衣はふかくそめて着む 花のちりなん後のかたみに」（紀 有朋）

と、桜の花を、秋には、

「竜田河 紅葉乱れてながるめり わたらば錦中やたえなむ」（詠み人知らず）

と、紅葉が散る竜田川の情景を錦ととらえるように、四季それぞれに咲き競う植物の花の彩りや野山の草樹の移り変わりになぞらえる色名が多く登場してくる。

とりわけ、貴族の女性たちは美しく着飾ることに心を砕き、俗に十二単といわれる装束のように、何枚もの衣裳を重ね着してはれやかなものとした。

数領着重ねた衣裳の、襟元や袖口、裾などにあらわれる流れるような色の調和、一領の衣のふき（注・衣偏に比。裾・袖口などの裏地が少し見える部分）にわずかにのぞく表と裏の色の対比、季節ごとに咲き競う花の彩や木の葉の色合いなどになぞらえて楽しんだのである。このような配色の妙が、いわゆる襲の色目といわれるものである。